子供の遊びに影響を与える環境的要因に関する研究

長 山 宗 美*

Study on environmental factors affecting playing behavior of children

Sobi NAGAYAMA

摘要：現在、子供達のまわりから多様な遊び場が消えて児童公園だけが残っているが、公園が遊び場として十分な機能を持つかどうかを探るために、京都ただすの森（下鴨神社）とその近隣の一児童公園で利用状況を調べ、訪れた子供達に聞き調査を行った。その結果、子供達が遊んでおもしろいと感じる要因は、遊び相手、遊具、自然、オープンスペースの存在であり、必要とする遊び場は年齢、性別によって多少の違いがあることがわかった。

1. はじめに

遊びは、子供にとって学習であり、遊びが、子供の運動能力や体力の養成、知的、精神的、社会的発達に果たす役割と意味は非常に重要である。遊びが子供の経験の拡大と充実をはかるので、遊び空間は、様々な経験学習が可能であるような、多様な要素を包み込んだ社会であることが望ましい。

遊びが成立する条件は、時間、場所、仲間¹⁾、技術²⁾の4点である。しかし、現在では、時間はおけいこや塾のために減少し、場所は都市化により空き地や原っぱ、田んぼが減少し、モータリゼーションで道路が危険になったため、道路という遊び場所も減少している。仲間についても、兄弟数の減少や、遊び時間の減少から、小数の同級生だけになり、昔のようなタテ社会がなくなった。四番目の技術についても、仲間のタテ社会がなくなったために、遊び技術が伝承されなくなった。このように、各々の要因が相互に関連をもちながら子供の行動に影響を与え、遊び成立条件が悪化し³⁾大人たちは、「最近の子供たちは、遊ばなくなった。」と嘆く^{4) 5)}

条件の改善策を考える時、時間については、子供を取りまく大人たちの価値観を変えることが必要であろう。仲間や技術については、学童保育、子供会、家庭文庫などが解消できるのではないかという指針が、いくつか示されている^{1) 5)}。最後に、場所については我々造園家が改善しなければならない。

現在では、公園が子供たちの戸外の遊び場の代表である^{1) 2) 3)}。子供たちの多くは、外で遊ぶとしたら、公園へ行くことになる。その上、公園までの道のりが危ない¹⁾

ため、近くの公園に行く³⁾ことしかできない。ということとは、今や児童公園は、子供の成長と発達に非常に大きな意味をもつ。

それでは、実際の児童公園は、それだけの役目を果たすことができるのだろうか。子供たちのまわりから多様な遊び場が消えて、児童公園だけが残った。児童公園は、昔の子供たちが遊んだ場所のような多様性を持っているだろうか。今の大人が「子供のころ、こんなところでこんな遊びをした」と喜々として語る⁶⁾ような遊びを、今の子供たちはしているのだろうか。

そこで本論文では、一児童公園と、昔の原っぱや雑木林、小川に匹敵すると思われるただすの森において、都市の子供たちの実際の遊びを観察し、比較することによって、遊び場の環境が現在の子供たちの遊びに与えている影響を知ることを目的とする。それを通して、子供たちの立場にたった都市の遊び場問題を考える基礎資料としたい。

2. 調査方法

(1) 調査地の概要

ただすの森（面積 12.4 ha）は、都市の中にありながら、常緑樹、広葉樹の大木があり、幅が1 mほどの小川が流れ、落ち葉を踏み締めながら、せせらぎや鳥のさえずりに耳を傾けることができる場所である。広場空間もあり、市民の多様な利用がみられる。自然環境豊かな場所として、このただすの森を選び、その対照地として、ただすの森に最も近い児童公園である、森が前公園（面積 18a。以下M公園と略す）を選んだ。両調査地は約 600

* 京都大学農学部

子供の来訪時の相手は、大人同伴が20～30%、子供同志が、40～50%であった。一時点在園者数変化のピークは、学校が休みの日3つ（11：00～12：00 13：30～14：30 16：00～17：30）、学校がある日は2つ（11：00 15：30）であった。午前より午後の方が利用が多い。

子供は年齢によって使う時間帯が異なり、平日は午前乳児、昼に園児、午後小学低・中学年が多かった。日曜日は午前乳児、園児、小学低学年、昼過ぎに小学低・中・高学年、夕方に小学中・高学年、中学生が多かった。

全利用者の滞在時間は5分以内が最も多く平均53%（ $\sigma = 6.1$ ）、最長は3時間以上であった。子供のみでは、学校のない日は6～30分が最も多く、平均38%（ $\sigma = 5.5$ ）、学校のある日は5分以内が最も多く（中学生、小学校高学年が多い）45%であった。小学校高学年と中学生は、平日短く、日曜日は長い。乳児、園児は6～30分が多い。小学校低学年は、5分以内と30～60分が多い。

(2) 追跡調査

ただすの森で計12名（延べ調査時間435分）、公園で計13名（延べ調査時間510分）を観察したところ、出現回数が多く、継続時間が短い行動は、休息、公園の遊具遊び、公園の乗り物遊びであった。出現回数が多く、継続時間が長い行動は、ボール遊びであった。出現回数が少なく、継続時間が長い行動は、ただすの森の生物遊びであった。

(3) 聞き取り調査

ただすの森で計336名（延べ調査日数11日、延べ調査時間2,150分）、公園で計234名（延べ調査日数7日、延べ調査時間1,355分）の利用者にインタビューした。有効回答数は、質問項目によって異なる。

被験者の年齢、性別は以下の通りで、性別の差、中学生の少なさが目立つが、全数調査の結果から妥当と思われる。

	ただすの森	M公園
男児	210人（62.5%）	135（57.7）
女児	126（37.5）	99（42.3）
乳児	38（11.3）	28（12.0）
園児	78（23.2）	43（18.4）
小学低	125（37.2）	104（44.4）
小学高	69（20.5）	41（17.5）
中学生	26（7.8）	18（7.7）

来訪頻度については、ただすの森では、毎日来る人20%（以下、5%括約）、M公園では、毎日来る人40%であった。性別では、ただすの森では男児の方が高く、M公園では男女差がない。年齢別では、両調査地とも乳児、園児が高く、中学生は低い。来訪頻度と他の遊び場の関係は、ただすの森によく来る人は戸外の遊び場が多く、

あまり来ない人は家がやや多い。M公園によく来る人は、家とM公園が多く、あまり来ない人は、M公園を除いた戸外が多い。

よく一緒に来る相手は、ただすの森では大人35%、1人10%、M公園では大人15%、1人15%であった。性別では、両調査地とも男児のほうが1人、子供同志が多い。ただすの森はM公園より男女差が大きい。年齢別では、両調査地とも年齢が上がると子供同志が増え、大人同伴が減る。小学校高学年は、特に子供同志が多い。M公園では、乳児の15%が1人で来る。

自宅から来たのかどうかについては、ただすの森では自宅外から5%、M公園では自宅外から15%が来ていた。

行動については、ただすの森では391例観察された中で、自然物遊び55%、ボール遊び15%、M公園では283例観察された中で、自然物遊び35%、遊具遊び30%、ボール遊び15%であった。性別の行動は（図-3,4）、ただすの森では男女差が少なく、異なるのはボール遊びだけで、男児20%、女児10%である。M公園では男女差が大きく、女児は遊具遊び45%、自然物遊び35%、男児は自然物遊び35%、ボール遊び25%であった。自然物遊びの内訳は、ただすの森では男女とも生物遊びが最も多く、M公園では、男児は生物遊び、女児は土遊びが多かった。年齢別の行動は（図-5,6）、両調査地とも小学生以下は自然物遊びが最も多く、中学生はボール遊びが最も多く、自然物遊びは極少ない。年齢が上がると、両調査地とも、ボール遊びが増加し、自然物遊びが減少するが、ただすの森では乗り物遊びが増加し、M公園では乗り物

図-3 聞き取り調査 性別にみた行動（ただすの森）

図-4 聞き取り調査 性別にみた行動（M公園）

遊び、遊具遊びが減少する。

居住地までの距離については、ただすの森では300 m以内が50%，M公園では、300 m以内が75%であった。性別による差はみられない。年齢別にみると（図-7,8），ただすの森では400 m以内からは園児，小学校低学年が多い。450 m以上からは小学校高学年，中学生が多い。M公園では300 m以内からは乳児，園児，小学校低学年が多い。500 m以上からは小学校高学年，中学生が多い。しかし統計的には，大人の同伴者がいる子供を除いて年齢と居住地までの距離の間の相関関係を見ても，有意に高い相関はなく，ただすの森は相関係数0.460で，中程度の相関（ $0.4 \leq r < 0.6$ ）であった。M公園は0.204で，弱い相関（ $0.2 \leq r < 0.4$ ）であった。

居住地別に来訪頻度を見ると（図-9,10），遠い人はどあまり来ない傾向がある。また，M公園では2～3日に1回以上来る人の80%が300 m以内で，ただすの森では2～3日に1回以上来る人の80%が1 km以内である。

おもしろさの評価については，ただすの森では「おもしろい」90%，「おもしろくない」4%，「おもしろい」という人の中で，「ここが一番おもしろい」人60%，「他に一番おもしろい遊び場がある」人40%であった。おもしろい理由として，豊富な自然，自然空間の多様性，遊具スペース，オープンスペースの広さ，友人がいることを評価した（図-11）。M公園では，「おもしろい」90%，「おもしろくない」4%で，「おもしろい」という人の中で，「ここが一番おもしろい」人60%，「他に一番おもしろい遊び場がある」人40%であった。おもしろい理由として，自然，遊具各々，オープンスペースの広さ，友人がいること，新しく友人ができること，異なる年齢層との接触を評価した。（図-12）

性別にみると（図-13,14），「一番おもしろい遊び場かどうか」については，ただすの森では男女の差がなく，共に60%が「ここ」と答えた。M公園では男女差があり，男児は55%が「ここ」と答え女児は80%が「ここ」と答えた。年齢別

図-5 聞取調査 年齢別にみた行動（ただすの森）

図-6 聞取調査 年齢別にみた行動（M公園）

図-7 聞取調査 年齢別にみた居住地までの距離（ただすの森）

図-8 聞取調査 年齢別にみた居住地までの距離（M公園）

図-11 聞取調査 ただの森が楽しい理由

図-12 聞取調査 M公園が楽しい理由

にみると、ただの森では「ここが一番」という人は小学生以下より中学生に多く、75%であった。M公園では「他が一番」という人が小学生以下より中学生に多く、55%であった。両調査地とも、乳児、小学校低学年は自分がいる所を高く評価した。

他の遊び場については、ただの森の人は、M公園の人より戸外の遊び場が多い(25%多)。両調査地とも、川は夏に多く(5%多, 10%多)、家、公園や学校は秋に多い(15%多, 30%多)。性別にみると、両調査地とも、庭や道路は女児の方が多い(10%多, 5%多)。川や空き地は、ただの森では男女の差がないが、M公園では、男児の方が多い(10%多)。年齢別にみると、両調査地とも家は乳児より乳児以上が多く、年齢が上がると家、庭、道路が減り、公園や学校、川や空き地が増える。

大人の同伴者の有無については、性別にみると、両調査地とも女児は男児より大人の同伴者有りの割合が高い。年齢別にみると、両調査地とも年齢が上がると同伴有りが減少するが、中学生は、小学校高学年と同じか、逆に増えた。

4. まとめ

一児童公園と京都ただの森において遊んでいる子供たち234名、336名にインタビューした。その結果、子供たちが遊んでおもしろいと感じる原因は、自然、遊び相手、遊具、オープンスペースの存在であった。児童公園において子供たちが評価した自然とは、樹木、その葉と実、土、夏のセミであった。ただの森に比べるとその数と種類は少ない。

遊び相手は、存在することが第一であるが、

図-13 聞取調査 性別にみた一番おもしろい遊び場 (ただすの森)

図-14 聞取調査 性別にみた一番おもしろい遊び場 (M公園)

その他に、児童公園をただすの森と比較した時に注目すべき長所として、新しい友人がしやすいこと、異なる年齢層との接触が可能ながあげられた。このことの第一の要因は、児童公園の誘致距離が短距離であるため来訪頻度が高くなり、遊びに来る子供たちは顔なじみになりやすいからであろう。第二の要因としては、面積が狭いため、中にいる人をすぐに把握できるし、人と人との距離が近くなるので、話すきっかけが生まれやすいことであろう。

遊具は、特に小学生以下と女児に人気があり、重要なものである。しかし、実際の遊びは、両調査地とも自然物遊びとボール遊びが多い。自然物遊びは年齢が低いほ

ど多く、ボール遊びは年齢が高くなるほど多い。遊具遊びの割合は、児童公園においても30%にすぎないし、短時間利用が多く、飽きられやすい。

オープンスペースは、両調査地で広さがまったく異なるが、子供たちの評価内容は等しく、広いこと、球技ができること、自転車に乗れることなどを評価した。男児は年齢が上がるとホームレンジが広がるとともに広さを必要とする遊びを行うようになり、児童公園では狭いため、広さを求めてただすの森へ遠くからでもやって来る。

また、実際に遊んでいる子供たちのうち、90%はそこで遊ぶことを「おもしろい」と感じていた。年齢が上がると児童公園では満足度が低く、ただすの森では高かった。性別では、男児に比べて女児の方が児童公園での満足度が高かった。

参 考 文 献

- 1) 藤本浩之輔 (1974) ; 子供の遊び空間 : NHKブックス
- 2) 佐藤丘, 中村攻 (1986) ; 子供の遊びに供される地域空間に関する研究 : 造園雑誌, 49(5), 245 - 250
- 3) 仙田満 (1984) ; こどものあそび環境 : 筑摩書房
- 4) 深谷昌志 (1983) ; 孤立化する子供たち : NHKブックス
- 5) 地域子育てセンター (1986) ; 子供たちの歓声はどこに 淡路の子供の遊び報告書
- 6) 木村宗美 (1985) ; 都市林における利用行動と林内の状態について : 京大卒論

Summary : A children's park was compared with an urban forest in order to research children's space preferences. The use of both the park and the forest was surveyed and the children visiting the places were interviewed. The result shows that the factors at which the children have fun are ; the existence of other persons to play with, playing instruments, natural objects and open space. There are differences between sex and among age classes concerning the objects.